

## 第9回 魅力ある教育づくり審議会 プレゼン説明原稿

### つながりのある教育の創造部会

#### 資料① 「小中一貫校（義務教育学校）の教育課程における先進事例」

①

一貫教育校（義務教育学校）における教育課程の先進事例についてご紹介いたします。

義務教育学校は小中一貫校施設一体型とも呼ばれ、小学校と中学校の校舎の全部又は一部が一体的に整備されていて、小中一貫教育が行われている学校のことをいいます。

同じ施設、同じ敷地内に小学校と中学校があるため、9年間一貫性のある教育活動などを効果的に実施することが可能になります。一方、児童生徒は9年間同じ施設で学習・生活することになるため、児童生徒の発達段階などに応じた計画的な指導等が必要になります。

②

小中一貫教育を進めるにあたって、施設一体型では施設隣接型や分離型よりも大きな成果が認められるとともに、課題も少ないことにつきましては、文部科学省が平成26年5月に行った「小中一貫教育等についての実態調査」で報告されています。

グラフからも読み取れるように、子どもたちにとって学習面に成果が認められています。

③

また、「中学校への進学に不安を感じる児童が減少した」、あるいは中学校進学時の環境変化に適応できず不登校や問題行動が顕在化する『いわゆる「中1ギャップ」が緩和された』の項目で、より大きな成果が認められることがわかります。

そのほか、小・中学校の教職員にとっても、互いの良さを取り入れたり、協力して指導にあたりたりする意識が高まっていることがわかります。

④

つぎに、義務教育学校の教育課程についてお話しします。

小中一貫教育にふさわしい運営体制を整えるために、これまでの小学校と中学校に加えて、新たな学校種である「義務教育学校」等の設置を可能とする改正学校教育法が平成28年4月1日に施行されました。具体的に、義務教育学校

はどのような学校なのか、特徴は次のとおりです。

小中一貫教育の基本形として、一人の校長の下で一つの教職員集団が、一貫した教育課程を編成・実施する9年制の学校で教育活動を行う学校です。

⑤

修業年限は9年であり、前期課程6年、後期課程3年と分けられており、基本的には、それぞれ小学校および中学校の学習指導要領が準用されます。

ただし、一貫教育の軸となる、新教科等の創設や、学年段階間・学校段階間での指導内容の入替え等、一貫教育の実施に必要な教育課程上の特例を設置者の判断で実施することが認められています。したがって、○前期4年、中期3年、後期2年の「4-3-2」や○前期5年、後期4年の「5-4」など柔軟な学年段階の区切りが設定できるのも特徴の一つです。

⑥

では、義務教育学校の教育課程の編成を大阪府内にあります、池田市立ほそごう学園を例に挙げてお話しします。

ほそごう学園は、平成27年4月に施設一体型小中一貫校として開校し、9年間を見据えた教育活動を行っている学校です。

⑦

基本的には、先ほどもご説明しましたように、前期課程6年、後期課程3年と分けられており、日課表も1～6年生は1単位あたり45分の授業、7～9年生は1単位あたり50分の授業で展開されており、それぞれ小学校および中学校の学習指導要領に準じています。これだけ見ると、通常の小学校や中学校と変化が分かりませんね。

8:30に通学バスが到着、8:35から朝の会。チャイムは1時間目と3時間目になるそうですが、小学生は45分授業、中学生は50分授業ですから先生が終わりの時間を測りながら授業が行われているそうです。

⑧

ほそごう学園では、子どもたちの成長年齢に合わせた教育活動を推進するために、学年段階を3つのステージ分けています。

前期は、入学したばかりの1年から学園生活に慣れてきた4年までが、学びの基礎を育てる重要な時期であり、丁寧な指導や支援とともに、時には学年合同

で学ぶことがあります。後にも出てきますが、異学年が合同で学習する機会を積極的につくりつつあるのも、義務教育学校ならではかもしれません。

池田市では 1 年から外国語活動で英語を学びます。前期は、自分や家族をはじめ身近な人との出会いを通して、人同士や人とのつながりを発見することを重視されています。

⑨

中期は、前期で身につけた学びの基礎を踏まえて、さまざまな方面に世界を広げる時期として、これまで課題の大きかった 7 年（中 1）の学習指導をよりスムーズにするために教科学習では 5 年から、一部教科担任制を導入し、小中の教員が一体となって専門性を活かした学習指導を行います。

日々の学びでも地域に出かけ、人々との出会いで社会性を身につけることが重要であるため、7 年（中 1）では、後期を視野に入れ、職業インタビューなど将来の仕事に関する学習も始まります。

⑩

後期は 9 年間の学習の総仕上げであるとともに、将来を見据えた進路選択の重要な時期です。8 年での職場体験学習、9 年での進路学習、人権学習の集大成である命の学習を通して、社会で生きていく力を育てます。

特に高校等への進学を中心とした進路指導については、単に学校選びに終わるのではなく、18 歳での多様な進路選択が可能になるようなキャリア形成をめざした学習や丁寧なガイダンスを実施しています。

⑪

その他、体育大会は 9 学年合同で行い、文化発表会も中・後期は互いの演技を鑑賞できるプログラムにするなど異学年交流を図っています。子どもの発達に合わせた前期・中期・後期の 4・3・2 年の指導体制を意識した教室配置を採用し、特に中期では、小学校高学年での一部教科担任制や 7 年生の授業への小学校教員の入り込みなど、小中の段差解消を図っています。また、希望する 2～6 年生を対象に放課後英語教室「ほそごう AS（アフタースクール）イングリッシュ」を実施し、中学校への指導者派遣事業により英語講師が配置され、5 年生以上の英語の授業に力を入れています。

⑫

異学年間で給食交流ができるランチルームや学校図書館にパソコン教室を併設したメディアセンターも備わっています。また、小さなイベントのできる交流

ホールも子どもたちに人気の場所です。

小学校の先生が中学生を教えたり、中学校の先生が小学生を教えに行くなどの時間帯を設けているなど、様々な工夫が図られています。

こどもたちは、ほそごう学園、小中一貫の良かった点として、上級生がやさしい、兄弟で通学できる、学校がきれい、色々なクラブがある、図書館が広くなり、本が多くなった、文化発表会や体育大会など一緒に遊べる、というような捉え方をしているようです。

一方、大変だった（困った）ことについては、試験中の休み時間はさわけない、小学生は部活があるからグラウンドが使えない、遊具が少ない、中学生は逆に授業で小学生優先が多くグラウンドが使えないとか、部活で使いたくても使えない、ボールが小学生に当たりそうで危ないなどを挙げているようです。

みんなと騒ぎ走り回りたい小学生と、落ち着いて勉強したい中学生、クラブ活動がしたくても小学生の授業があって使えない、一方、遊具が少なくなったという小学生の発言など発達段階の違いからくる課題も多いようです。

⑬

冒頭にもお話ししましたように、義務教育学校の成果は徐々にあらわてきており、9年間の一貫した教育や中1ギャップの解消など、教育課程上、有効な利点も多数ある中、9年間同じ校舎で過ごすことによる、人間関係の固定化や、数具が少ないなど発達段階と環境（施設）が合わない場合もあるということ。また、1人の校長が9学年を把握しなければならないなどの課題もあります。

今後、義務教育学校が増えていく中、地域の在り方や、子どもたちの教育にどのような影響を与えていくのかが、注目されています。